

# 第71回 獣医学セミナー

## 種同定が抱える課題

– *Gongylonema* 研究を例として  
(付説：サルディニア遠征記)

佐藤 宏 先生  
(獣医寄生虫学)

2018年 6月27日 (水) 16:00-17:00

本館2階 大会議室

*Gongylonema* 属線虫は上部消化管粘膜の上皮層内に寄生する細長い旋尾線虫で、虫体前部体表には疣状突起が並び、その特徴的な形態は印象に残る。1926年の山極・市川の幻のノーベル賞「コールタール塗擦による人工癌作出」は、フィビガーの「寄生虫による人工癌の研究」に奪われた。この寄生虫こそ、ラットの胃粘膜寄生の *G. neoplasticum* である。糞食性甲虫などを中間宿主とする *Gongylonema* であるが、*G. pulchrum* (美麗食道虫) は人体感染する人獣共通寄生虫でもある。国内では、家畜(牛)や野生動物(シカ、イノシシ、サル、キョン)、動物園動物(リスザル)、3例の人体感染の原因として *G. pulchrum* が知られる。この世界的な種から区別して、私たちは *G. nepalensis* を種記載した。もともとネパールの水牛に寄生する種として検出したが、最近になって、サルディニア島(イタリア)の牛、羊、山羊、ムフロンの、イノシシ、キツネでの寄生例が報告された。*Gongylonema* 属線虫を例にして、現在取り組む寄生虫の種同定をめぐる課題を紹介したい。

★飲み物・おやつを用意します(回青橙の会後援)。  
教員・学生の積極的な参加をお願いします! ★

連絡先：柳田哲矢(5914) 島田 緑(5909)

